
デバイスになった少年

ザムジード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デバイスになった少年

【Nコード】

N1683V

【作者名】

ザムジード

【あらすじ】

なのはを助ける為に瀕死の重傷を負ってしまった少年の運命とは？

突然の悲劇

僕の名前は、神童拓真です。

拓真 side

今日は、僕の幼馴染である高町なのはと、お買い物デートをしました。

「拓真君は、どっちの服が好き？」

なのはは、僕に2着の服を見せて、僕に選ばせていた。

「僕は、右側の服を、選ぶなのはは、笑顔をで、僕にこう言った。

「さすが拓真くん私の好みよく知ってるね」

「それは当然だよ僕たちは、幼馴染ですつと何をするにも、一緒だったしそれに、なのはは、僕の・・・だしね」

僕は、なのはの質問に対し、顔を赤くしながら答える。

「なーに拓真君最後のほうなんて言ったの？よく聞こえなかったよ」

なのはが僕に近づいて、こう言った。

「拓真君教えてよ」

僕となのはは、そんな他愛のない話をしながら家に、帰っていると突然なのはが走り出したのだった。

僕が、あわててなのはを追いかけると、そこには、車道に小動物がいた。

なのはは、小動物を助けると安堵し、歩道に戻ろうとした時、突然なのはのほうに、居眠り運転のトラックが進入してきたのだった。

「キャアアアー」

なのはは、自分に突っ込んでくるトラックを見て、恐怖で体がうごけずにいた。

「私死ぬんだ。お父さんお母さんお姉ちゃん 拓真君ごめんね私拓真君のこと大好きだったよ」

なのはが覚悟決めた時、なのはを呼ぶ声が聞こえた。

「なのはー」

僕は、全力で走りなのはに追いつくと、なのはに迫るトラックが見えたので、急いでなのはを助ける為に、行動を開始したのだった。そして、なのはの元に着くと、トラックもスピードを上げて突入してきたのだった。

それを見た僕は、なのはを歩道まで、突き飛ばしなのはを助け、なのはの安全を確認した時、僕はトラックに、轢かれてしまった。

拓真 side end

なのは s i d e

「私は拓真君に、歩道まで突き飛ばされると、その直後トラックが拓真君を轢いていた。」

「いやああ拓真君拓真君」

私は必死に大好きな人の側で、名前を呼んでいたが、次第に拓真君の体が、冷たくなっていくのがわかった。

「拓真君死なないでお願い私を一人にしないでー」

私が拓真君を抱えて叫んでいると、その時私と拓真君の周りが灰色の世界に包まれたのだった。

そして、空から一人の少女が降りてきたのだった。

なのは s i d e e n d

謎の少女

なのはを助ける為に、トラックに轢かれた拓真の生死は？

そしてその直後なのはたちの前に、現れた少女は一体何者なのだろうか？。

なのは side

私は、拓真君の近くに行くと、突然私たちの前に、不思議な雰囲気
の少女が、現れたのでした。

「あなたは一体何者ですか？」

私は、不思議な少女に聞いた。

「私は、天界から来ました女神のソフィと言います。よろしく願
いしますね高町なのはさん」

「！！どうして私の名前を、知ってるの？」

私が聞くと、ソフィは答えたのでした。

「それは、私が、あなた達二人の担当ですからね」

「担当？何の？」

「それは、死後の世界に、案内する為ですよ本来ならね」

そう言ってソフィは、間を少し置いて喋りだしたのだった。

「実は、これからなのはさんあなたには、数々の試練が待っていますが、これからあなたには、質問をします。その返答次第では、拓真さんを死後の世界に送りますので、慎重にそして、素直にに答えてくださいね」

そして、ソフィからの質問が、私の愛する人の生死を決めることになってしまったのだった。

果たしてソフィの質問とは、一体何？

なのは s i d e e n d

ソフィの質問

そして、拓真の生死を、決めるソフィによるなのはへの質問がタイムが始まった。

三人称 side

「それでは高町なのはさんあなたには、いくつかの質問をします。それでは、なのはさんにとって、拓真さんは、どういうひとですか？」

「私にとって、拓真くんは、とても大切な人です。」

「大切といましたが、どういう風に、大切なんですか？」

「拓真くんが、いてくれたので、私は、お父さんが入院して私以外の家族がお店や、お父さんの看病で、家にいなくて、私は一人でいたとき、私は拓真君と出会い琢磨君のおかげで、私の心は救われたの。だから今度は、私が救えるなら拓真君を救いたい」

なのはは、拓真に対する想いを、ソフィにぶつけていた。

なのはの想いを、聞いたソフィは、なのはに最後の質問をしたのだった。

「なるほどよくわかりました。高町なのはさん拓真さんを助ける方法は、ありますがその方法を使用した場合あなたに過酷な運命が、待っていますよ」

「過酷な運命で例えばどういうこと？」

なのはが、ソフィに聞くがソフィは答えなかった。

そして、ソフィが拓真の体に触れると拓真の体が、光を放ちだしたのだった。

「きゃなにこの光？」

なのはは、強烈な光を浴び、目を閉じてしまった。

目を開けたなのはは、驚いていた。自分の横にあったはずの拓真の体が消えていたからだ。

「ソフィちゃん拓真君の体が消えたよ」

「心配しないでなのはさん拓真さんはここにいるから」

そして、ソフィはなのはに、赤い宝石を見せた。

「これで、あなたたち二人は、過酷な運命の中に入ってしまった。そして赤い宝石になった拓真さんは、いずれ目覚めるわそれじゃあね高町なのはさん」

そして、ソフィは赤い宝石となった、拓真をなのはに渡し、どこかへと消えて行った。そしてソフィが消えたことで、なのはは、元の空間に戻ったのだった。

三人称 side end

変化

そして、次の日、なのはは、学校に行く為、支度をしていた。机の上には、赤い宝石が、置かれていた。

なのはは、昨日家に帰ると拓真のことを家族に話したのだった。だが家族全員の答えは、一緒だった。

三人称 side

「ねえなのは、拓真君でだれなの？」

「え」

なのはは、家族の答えに驚いていた。なんと、なのはの家族全員が、拓真を覚えていなかったのだった。

そしてなのはは、昨日まで拓真と一緒に送迎バスを待っていたバス停に着いて、なのはは考えていた。

「どうしてお父さんたちは、拓真君の事を覚えてないんだろう。昨日までは、覚えていたのに」

なのはは考えていたが、答えは出なかった。そして、清祥大付属小学校行きの送迎バスがやって来たのだった。

なのはが、送迎バスに乗ると、置くからなのはを呼ぶ声が聞こえてきた。

「なのはおはよう」

「おはようなのはちゃん」

なのはを呼んだ声の主は、アリサとすずかだった。

「アリサちゃんすずかちゃんおはよう」

そう言いながらなのはは、何時もと同じく二人の間に入ると二人に拓真の事を聞いたが、二人も拓真の事を、覚えていないのだった。

「ごめんなのはその拓真で誰なの？」

アリサが言う。

「ごめんなのはちゃん私も拓真君のこと覚えてないんだ」

「どうしてみんな拓真君の事を、覚えていないの」

なのはは、学校の屋上でつぶやいていた。すると景色が変わり気が付くと、そこに女神のソフィがいたのだった。

三人称 side end

変化後編

なのはが、屋上にいると、突然景色が代わり、なのはが目を開けると、そこにはソフィがいた。

三人称 s i d e

「高町なのはさんどうですか？昨日と違う一日過ごしてみて」

「ソフィちゃんこれはどういうことなの？何でみんなに、拓真君の記憶がないの？」

なのはは、勢いよくソフィに、問い詰めたのだった。

だが、ソフィは、そんななのはの態度は、気にせず、なのはの問いに答えたのだった。

「あれ私前に言いましたよね。拓真さんを救う時あなたたちには、過酷な運命が待ち受けていると、実は、私が、拓真さんを生き返らせるときに、代価として、なのはさん以外の人たちからの拓真さんに関する記憶を貰いましたので、皆さんは拓真さんの事は覚えていないはずですよ」

そう言つてソフィは、なのはの質問に答えたのだった。

「あ、でも思い出なんて拓真さんが、目覚めれば新しく出来ますしね」(まあ目覚めたらの話ですが少なくとも、なのはさんが3年生にならないと、拓真さんは目覚めませんが)

ソフィはなのはにそう言っていると、帰る準備をしていたのだが、なのはがソフィに、質問していた。

「ねえソフィちゃん本当に、拓真君この宝石の中で、本当に生きてるの？」

「それは本当に生きてますよ。ただ、まだなのはさんが拓真さんの起こし方を知らないだけです」

「そうですねあと2年待てば拓真さんの起こし方を教えてくれる人が、現れるかもですよ。それでは」

そう言つてソフィは、消えたのだった。

なのはは、ソフィが消えてからも屋上にいたが、アリサとすずかによつて午後の授業がある教室へと連れて行かれたのだった。

「後2年か」

なのははそう呟いたのだった。

そして、時は流れなのはたちは、小学3年になった。そして物語は、静かに動き始めてたのだった。

三人称 side end

不屈の心

なのはは、小学校3年になったある日の朝なのはは、不思議な夢を見ていた。

その夢の内容とは、拓真が、なのはの知らない男の子と、拓真たちを後ろから追いかける黒い影から逃げていた。

そして夢は何時も同じところで終わるのだった。

その時、なのはの携帯がなり、なのはは、起きたのだった。

三人称 s i d e

「ふああ、またあの夢を見たけど、拓真君と一緒に、いる男の子は、一体誰だろう」

なのはは、そう思いながら、制服に着替え学校に行く為の準備を終え家族の集まるリビングに向かい、朝食を食べて学校に、行く為、送迎バスが止まる停留所に向かうと、すでにバスが来ていたのだった。

「やばい急がないと」

「はあ、はあ、間に合った」

なのはがバスに乗ると、なのはを呼ぶ声が、聞こえて来た。

「おはようなのは」

「なのはちゃんおはよう」

「あ、アリサちゃんすずかちゃんおはよう」

なのはに声をかけた声の主は、なのはと拓真の友達のアリサ・バニングスと月村すずかだった。

そしてなのはは、二人の間に座ると、いつも首から下げている赤い宝石を、取り出していた。

その時、アリサがなのはに、聞いたのだった。

「ねえなのは、聞いていい？いつも大事に赤い宝石持ってるけど、その宝石どうしたの？」

「これは私の大事な人からの預かり物なんだよ」

「へえそうなんだ」

すずかは、なのはの答えを聞いて納得していた。

そして、学校に着き、授業を受けていた時、なのはは、懐かしい声を聞いたのだった。

（なのは「

「！！拓真君？拓真君どこにいるの？」

「高町さんどうかしましたか？今は、授業中ですよ」

なのはは、先生に注意されてしまった。

「先生ごめんなさい」

そして、授業が終わりお昼休みになって、なのはの周りに異変が起
こり始めていた。

三人称 s i d e e n d

不屈の心中編

なのはの周りで、起こり始めた異変とは？

その異変が起きたのは、午後の授業の最中だった。

なのはside

私は、午後の授業を受けていると、突然学校内が、ソフィが、現れるときに、出来る空間に似ていた。

そして、私が学校の外を見ると、黒い影が建物を破壊しながら移動をしていたのだった。

「きゃあ、あれはなんなの？」

私が、黒い影の存在を見て、驚いてると私の頭の中に響いてきたのだった。

「助けて」

私は謎の声の正体が気になり、学校を抜け出し、拓真君と共に、現場に向かった。

なのはside end

そのころ現場では、一匹のフェレットが、黒い影の攻撃をかわしな

がら逃げていた。

??side

「はあはあ、このままじゃまずいこのままだと、やられる」

その時フェレットは、自分が張った結界内で人影を見つけたのだった。

「この世界に、僕の結界に這入れる人がいるなんて、もしかしたら管理局の人かもしれない」

「よしあの人に協力してもらおう」

そして僕は、協力者を探し出した。

??side end

三人称side

なのはは、現場に着き、黒い影により、壊された街を見て、啞然としていた。

「一体あれは何？」

「あなたは、管理局のかたですか？」

なのは考えてえいると、なのはは、声をかけられたのだった。

「え、きゃあ」

なのははふいに声をかけられ驚いてしまったのだった。

三人称 side end

不屈の心後編

あなたは誰？

なのはは、一人の少年と、話していた。

三人称 s i d e

「僕の名前は、ユーノです君の名前は？」

「私の名前は・・・きゃあ」

その時、なのはに向け黒い影が、攻撃をしてきたのだった。

「！！あぶない」

ユーノは、黒い影からの攻撃から防御魔法を使い、なのはを守ったのだった。その時ユーノは、なのはが首からさげている赤い宝石を見て、驚いていたのだった。

「これ僕の探していたレイジングハートだどうして君が持っているの？」

「え、それは・・・」

なのはが答えに困っているとユーノが、こう言った。

「レイジングハートが、あるならアイツを封印できるぞ」

「すいませんが封印を手伝ってくれませんか」

「うんいいよそれと私の名前は、なのはだよユーノ君」

「ありがとうなのは」

なのはが、そう言うと、ユーノが、笑顔でなのはに感謝の言葉を言っていた。

「それでユーノ君あの黒い影は、何」

「あれはジュエルシードの思念体です」

「どうしたらあれを、封印できるの？」

「それには、まずレイジングハートを起動させてください。今から起動パスワード言います。」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「不屈の心は、この胸に」

「不屈の心は、この胸に」

「この手に、魔法を」

「この手に、魔法を」

「レイジングハートセットアップ」

なのはがそう言うとなのはの服装が、代わり白と青を、基調としたバリアジャケットを着ていた。

そして、なのはには、もう一つ嬉しい事が起こっていた。

「なのはごめんね今まで、寂しい想いをさせて」

レイジングハート起動させたことにより拓真の意識が、覚醒したのだった。

「行くよなのは僕たちでジュエルシードを、封印するよ」

「うんわかった拓真君サポートお願いね」

「ああ、それが今の僕の役目だから任せてなのは」

そして、二人は始めての先頭とは思えない速さで、ジュエルシードシリアルナンバー21を封印をしたのだった。

封印作業を終えたなのはは、ユーノと、詳しく話をするため近くの公園に向かっていた。

三人称 side end

公園にて

なのはとユーノは、夜の公園で、話をしていた。
三人称 s i d e

「ジュエルシード封印手伝いしていただきありがとうございます。
改めて自己紹介をします」

僕の名前は、ユーノ・スクライアです」

「ユーノが、名前でスクライアが、部族名なのでユーノと呼んでください。」

「次は私の番だね」

「私の名前は・高町なのはだよ。高町が、家族名でなのはが・名前だよよろしくねユーノ君」

なのはは、ユーノに、笑顔で握手をしていた。

（なのは）

その光景をレイジングハートとして、見ていた拓真は、ユーノに対して、嫉妬をしていたのだった。

「あのはさんはそのレイジングハートを、持っていたんですか？
それは、2年位前に僕がなくなりましたが、ミットチルダで」

ユーノがなのはに質問しているとなのは、不機嫌な表情しながらなのは答えたのだった。

「もうユーノ君ちゃんと私のことは、なのはて呼んでよ」

「あ、ごめんなのは」

ユーノは、少し照れながらなのはに謝っていた。

そして、二人は、高町家に、行くことにしたのだった。

なのはは、知らなかったこの後ユーノに訪れる悲劇を

三人称 side end

ユーノの悲劇

なのはとユーノは、なのはの家に、向かっていた。

なのはの家に着く前に、ユーノはなのはからこう言われたのだった。

三人称 side

「ユーノ君死なないでね」

「！！ちょ、なのはそれはどう意味なの？」

ユーノが、なのはに理由を聞こうとした時、なのはが家の玄関を開けたのだった。

そして、玄関からなのはの父親である土郎と、なのはの兄の、恭也が玄関から飛び出して二人は、ユーノに木刀を突きつけ二人は、こう言ったのだった。

「お前はなのはの何だ？」

「なのはは、渡さんぞ」

ユーノは、何が起こったのかわからないまま恐怖の余り体が固まっていた。

その時ユーノに助け舟を出したのは、なのはの母親の桃子と、なのはの姉である美由紀が、土郎と恭也の耳を引っ張り、二人を家の中

に、引きずり込んでいた。

その光景を見てた、なのはは固まっているユーノに、声かけていたのだった。

「ユーノ君大丈夫？」

なのはは、ユーノに声をかけるが、無反応だった。

「なのはこりゃ駄目だとりあえず家にあげないとユーノ死んじゃうよ」

「えー」

拓真がそう言うのと、なのはは、驚き急いでユーノを自分の部屋に、連れて行きベットで寝かせていた。

ユーノを寝かせたなのはは、リビングで、桃子たちと話していた。

「それでなのは、お父さんじゃないけどあの男の子とは、何時からの友達なの？」

桃子なのはに聞いた。

「えーと実は」

なのはは、本当のことは、隠しつつ二人が納得できる言葉を選んで二人に伝えていたが、桃子と美由紀には、なのはが嘘をついているのはわかっていたのだが、二人はそのことには、触れずなのはの

話を聞いていた。

「なのはもう今日は遅いからこの話の続きは明日にしましょう」

桃子はそう言って、話を終らせたのだった。

「お母さんお姉ちゃんおやすみなさい」

なのははそう言って、部屋に戻って行ったのだった。

「ちょっとお母さんこのままでいいの？あの子嘘ついてるよそれにまだ何か隠してるよ」

美由紀が桃子にそう言うが、桃子はこう言った。

「私は、なのはを信じてるからあの子が伝えてくれる日がくるまで待ちます。」

そして桃子と、美由紀は、それぞれの部屋に戻って行ったのだった。

三人称 side end

魔法少女

なのはが、ジュエルシードを初めて封印した翌日ユーノは目を覚ましたのだった。

三人称 side

「うーんここは？どこだろう」

ユーノは昨日の出来事を思い出していたその時、カチャとユーノのいる部屋の扉が開いた。

「あ、ユーノ君起きたんだね、よかった」

開いた扉の向こうから女の子の声が聞こえて来たのだった。

「あ、なのはおはようここはどこなの？」

ユーノがなのはに聞くと、なのはは答えた。

「ここは私の部屋だよユーノ君」

「僕は一体どうしたんだろう？なのは僕は、どうしてここにいるの？」

ユーノは、なのはに昨日なのはの家に来た時からの記憶が無かったので、なのはに聞いていた。

「ユーノ君ごめんね昨日は、うちのお父さんとお兄ちゃんが、ユーノ君を、驚かせて」

ユーノは、なのはの話を聞いて、少しずつ思いだしていた。

そして、ユーノは起き上がりなのはにこう言った。

「なのは今からなのはが、昨日得た魔法のことを教えるね」

「ありがとうユーノ君」

なのはは、魔法のことを教そわろうとしたとき、なのはを呼ぶ声が聞こえたのだった。

三人称 s i d e e n d

15000PV突破記念

作「デバイスになった少年15000PV記念回です」

な「作者さん今回は、なんかするの？」

作「正直に言うと、この作品が、早くも記念回をするようになるとは思わなかったんだ」

拓真「その理由はやはり俺の設定のおかげだと思っぞ」

作「やはりお前もそう思うか、拓真」

「ああ」

??「うちもそう思っで」

??「私も」

作「あなたたちの出番はまですよ」

「別にいいやろ。なあ作者さん」

作「さてこれからのデバイスになった少年の予定ですが、無印編では基本は原作の流れで行く予定ですが、少し、変化するところもあります」

全「これからデバイスにナツた少年をよろしくお願いします」

魔法少女2

なのはは、ユーノに魔法の声尾を聞こうとした時、なのはは、桃子に呼ばれたのだった。

三人称 s i d e

「なのは、ちょっと手伝ってくれない？」

「はいお母さん。一体何の用事なんだろう？あ、ユーノ君は、私の部屋にいてね」

「うん。わかったよなのは」

そしてなのはは、桃子のいるリビングに向かった。

「ここがなのはの部屋か、女の子らしい部屋だな」

ユーノは、なのはの部屋で、これからのことを、考えていた。

「これからどうするか？このままなのはを、僕の都合で巻き込んでいいのか？レイジングハートも見つけたことだし、このまま僕がこのままいなくなったほうが、彼女の為じゃないのかな？」

「僕と一緒にいるとなのはの平穏な日常が壊れるかもしれないし」

ユーノは、ある決心をしたのだった。

一方なのはは、リビングで桃子とユーノのことを話していた。

「ねえ、なのはあの子は、起きたの？」

「うん、起きたよお母さん」

「そういえばなのはあの子の親御さんは、どうしてるの？あの子家に来た時一人だったから気になってね」

「お母さんあの子の名前は、ユーノ君て言つの」

「あら、そうなのわかったわユーノ君ね。なのはユーノ君を呼んできて一緒に、夕飯食べたいからね」

桃子は、なのはにそう言うと、キッチンに行き、夕飯の準備を鼻歌を歌いながら始めたのだった。

そしてなのはは、ユーノを呼びに行く為自分の部屋に入ると・レイジングハートをユーノが持ち去るうとしていたのだった。

三人称 s i d e e n d

魔法少女3

「ユーノ君何しているの？」

なのはside

私は自分の部屋にはいると、ユーノ君の行動が、私には、不自然に見えたので、私はユーノ君に声をかけた。

「わ、何でもうなのはが戻ってきたの？」

ユーのは、明らかに動揺していたのだった。

（どうしよう本当ならなのはが、戻ってくる前に、レイジングハートを持って消える予定だったのに）

私は、ユーノ君が動揺して考えていると私に拓真君の声が、聞こえてきたのでした。

「なのは助けてくれーユーノの奴俺を持ってなのはの前から消えるつもりだ」

（えーそれは本当なの？拓真君？）

（ああ、本当だよなのは）

私たちが、念話で話しているとユーノ君が、復活していたのだった。

「ねえユーノ君早くレイジングハートを出してよ」

「え、何を言ってるのなのは僕は、レイジングハートを持ってるわけ無いよ」

私は、ユーノ君の言葉なんて、信じていなかったが下手したら、ユーノ君に拓真君の事がわかってしまう可能性が、あったのでユーノ君にたった一度のチャンスをあげたのでした。

「ふーんじゃあこれを見ても持っていないと言えるかな？ユーノ君」

私は、ユーノ君にそう言うとは私はレイジングハートセットアップと言うと、ユーノ君の胸もとが光だし、拓真君が、出てきてBJを装着しユーノ君にレイジングハート（琢磨君）をユーノ君に突き出した。

「これでも認めないのかなユーノ君？」

なのはside end

このときユーノは直感していた。

なのはに逆らったら自分は死ぬんだと思って素直に謝ったが時すでに遅かった。

こつしてなのはにユ一ノへのお仕置きは、一晩中続いたのだ
た。

ジュエルシードを探せ1

ユーノの悲劇の翌日

なのはは、いつもどおり、レイジングハートとなった拓真を連れて学校に来ていた。

一方ユーノはなのはのお仕置き後に、なのはのお願いで、士郎と恭也によって、精神を鍛えなおされていた。

三人称 side

なのはが、学校に着くと一台の車の中から声をかけられたのだった。

「なのはおはよう」

「おはようなのはちゃん」

そして、車から降りてきたのは、なのはの友人であるアリサとすずかだった。

「あ、アリサちゃんすずかちゃんおはよう」

なのはたちは教室に行くと、クラスのみんなが、ざわめいていた。

「ねえ、どうしたの？今日みんなそわそわしてるけど？」

なのはが、クラスメイトにみんなが、そわそわしている理由を聞くと、クラスメイトが答えたのだった。

「突然ねこのクラスに、男女の転校生が来るらしいよ高町さん」

「転校生？」

なのはたちは、始めて転校生が来ることを知ったのだった。

そのころユーノは一人でジュエルシードを探していたら金髪のに少年に、出会っていた。

「お前もジュエルシード探してるならお前は俺たちの敵だな」

そう言つて少年はデバイスを展開し、戦闘準備を完了させていた。

「君は一体何者なんだ？」

ユーノは謎の少年に問いかけるが、少年は答えないのだった。

謎の少年の正体とは？

三人称 s i d e e n d

ジュエルシードを探せ2

ジュエルシード探索中に謎の少年に、出会ったユーノだった。

「君は一体誰だ？何のために、ジュエルシードを求めているんだ」

ユーノは少年に問いかけるが、少年はこう答えたのだった。

「何だユーノ・スクライアお前ごときが俺に指図するなよ」

少年がそう言うときユーノは驚いていた。

「どうして？君が、僕の名前を知っているんだ？」

「俺たちはこの世界のことなら何でも知ってたんだぜ」

少年は、そう言いながら胸元から、赤い宝石を取り出したのだった。

「……それは」

「行くぜレイジングハートセットアップ」

「了解」

そして、少年は光に包まれたのだった。

そのころなのはは、学校に、行っていた。
なのはside

私たちが教室に入ると、クラスのみんながそわそわしていた。ただその理由は、すぐにわかりました。

「はい皆さん静かにしてくださいね。今日は転校生を紹介します。」

「入ってきてくださいね」

先生に言われ、教室に入る少年と少女だった。

私は、この子達を見た時、私に向けられた憎しみに満ちた視線を感じて、私は、恐怖を感じていました。

なのはside end

一方ユーノは、対峙している少年が、なのはと同じ、レイジングハートを持っていることに、驚いていた。

「どうして君がそれを使えるんだー」

ユーノは、冷静に考えることが出来ずに、感情的になり、少年に聞いた。

「それは、俺がレイジングハートの持ち主である高町なのはの息子だからだ」

「！っ」

ユ一ノは、少年の告白に対し、驚愕していた。

果たしてなのは息子とっている少年の目的とは。

そして、二人の転校生の正体とは？。

ジュエルシードを探せ3

ユーノはなのはの息子と言っている少年の話を聞いて、驚愕していた。

「何だつて！！君が、なのはの息子だつてー」

三人称 side

「ああ、そうさ僕の名前は、神童・・・」

少年が、ユーノに名前を伝えようとしていると、突然二つの巨大な魔力反応を、感じたのだった。

「これは、ジュエルシードの反応だ」

ユーノは、ジュエルシードを発見したことを、なのはに連絡したのだが、なのはの返事は帰ってこなかったのだった。

その時謎の少年に念話で声が聞こえて来た。

「やあ刹那元気だったかい？」

「やはりお前か、悠馬お前までこの時代に、来たのか？どうした？」

「刹那大変だぞ今お前の母さんが、あいつらに捕まってるぞ」

なのはは、二人の転校生によって、捕まっていたのだった。

「何だと」

「刹那まずいぞ早くお前の母さんを助けないと歴史が変わってしまう」

悠馬は、刹那をなのは救出に行かせようとしたが、運悪く、ジュエルシードが、発現を開始してしまったのだった。

ユーノはこの状況を打破できるのか？

三人称 s i d e e n d

一方なのはと、拓真は

そして拓真となのはは、転校生二人により教室に幽閉されていたのだった。

「拓真くんどうしたらいいのかな？」

「なのはとにかくここを脱出して、ジュエルシードを封印しないと」

なのはと、拓真もジュエルシードの発現したのは知っていた。

その時転校生の少女が、なのはたちの前に、現れこう言った。

「お久しぶりですねお二人とも」

ジュエルシード探せ4

なのはの前に、現れた、転校生の少女の正体は、女神のソフィだった。

三人称 side

「あ、あなたはソフィちゃん!!」

なのはは、転校生の少女の正体が、女神ソフィとわかり、驚きを隠せないでいた。

「どうしてソフィちゃんが、こちらの世界に来てるの？」

なのはが、ソフィに聞くと、ソフィはこちらの世界に、来た理由をなのはと拓真に伝えたのだった。

「実は、このままだとなのはさんと拓真さんは死んでしまうのです。何者かにより本来の歴史とは、異なってしまうので、我々女神族は、歴史が元に戻る間、私が、ユーノ君の代わりにジュエルシードの探索を行うのでよろしくお願いします」

少し時間は遡りジュエルシードの発現を見たユーノは現場にに向かったのだが、そのジュエルシードは、変異型のジュエルシードだった。そして、ユーノはジュエルシードに、取り付かれてしまった。

変異型のジュエルシードは、ユーノに取り付くとどこかへと転移をしたのだった。

果たして、ユーノはどこに連れ去られたのか？。

時間は戻り、なのはたちはソフィの発現を聞いて、大声を出し、驚いていた。

「えーユーノ君は、どうしたの？」

なのはの問いに、ソフィは答える。

「ああ、あの人ですか？あの方は、私たちには、必要ない人ですが、ユーノさんは誘拐されましたよ」

淡々と答えるソフィに対し、なのははまた大声を出し、驚いていた。

「えー」

三人称 side end

刹那と悠馬

刹那 side

俺の名前は、神童刹那10才

「俺は、ある目的のためにこの時代に来た。だがどうやら奴等もこの時代に、来たらしいなナンバーズの奴等も」

「ただこちらに来たのは俺と俺と戦闘中だった二人だった。」

俺は、父さんと母さんが、後に、JF事件と言われる事件後の1年後に俺は生まれる。そして俺が、6才の時にある事件が、起きてしまふ。その事件で、俺は、大事な物を失った」

「おい悠馬本当に、やつらの反応があつたのか？」

「うんそれは間違いないよ、4年前にスカリエッティを脱獄させ、刹那の大事な物を、失うきっかけを作り、今まで刹那の母さんと、父さんが解決してきた事件の裏に、潜む組織が暗躍していた。その組織の名は・・・」

刹那 side end

「う、ここはどこだ？」

ユーノは目覚めるとそこは、手術室らしき部屋だった。

「お目覚めかねユーノ・スクライア君」

突如ユーノのいる部屋全体から謎の声が、響いてきたのだった。

「――誰だ」

ユーノは、謎の声に対して、強い口調で聞いていた。

「今から君には、改造魔道師になってもらうぞ」

謎の声は、そう言うと、ユーノの改造手術が開始されたのだった。

「うわああああやめろーーー」

ユーノが大声で叫ぶが、手術は、侵攻していくのだった。

あと残るは、脳改造となった時、ユーノの前に、刹那と悠馬が、現れた。

「まさか本当に、この時代にも、来るとはな、ネオデストロンめ」
刹那がそう言うと、謎の声が聞こえて来た。

「久しぶりだな神童刹那と、風見悠馬まさか我々を追いかけてくる
とはな」

謎の声はそう言って、二人の行動を褒めていた。

一方なのはたちは学校が終り、帰宅中に、ジュエルシードの気配に
気づき現場に向かっていた。

ジュエルシードと二人の魔法少女

なのはside

私とソフィちゃんは、学校から帰宅途中にジュエルシードの発現した時に、出る強力な魔力反応を感じたので、現場に向かうと、そこには、犬の化け物がいました。

「何？あの化け物は」

私が驚き混乱していると、ソフィちゃんが冷静に私に教えてくれました。

「どうやらあの化け物は、ジュエルシードがこの世界の生き物に、取り付き凶暴な生き物へと姿を変えたんでしょうね」

「ええ、それじゃどうすればいいの？」

「おそらくですが、ジュエルシードを封印できれば元の姿に戻ると思いますよなのはさん」

ソフィちゃんの答えを聞いた私は、拓真君と共に、ジュエルシードの封印するために行動を開始しました。

この時、私たちは、気づいていなかった。私たち以外の魔法少女の存在に。

「よし、なのは今だ封印を」

「うん拓真君リリカルマジカルジュエルシードシリアルナンバー1
0封印」

私は、何とかジュエルシードを封印した時、異変が起きたのでした。

なのはs i d e e n d

三人称s i d e

「ネオデストロンだつて」

ユーノは自分を誘拐した組織が伝説となっている組織の名前が同じであることに、驚いていた。

「久しぶりだな神童刹那。 風見悠馬よ」

謎の声が刹那たちに向け喋りだしたのだった。

「くく、お前たちもこの時代までついてきたのか今我々の作戦が始まるどころだみていくがいい」

謎の声がそう言うともニターが現れ、そこに移っているのは、なのはだった。だが、なのはは、傷ついていた。

「――母さん」

刹那は傷ついたなのはを見て、大声で叫んでいたそして、刹那と悠馬は驚いていた。

なのはの相手の姿を見てその相手とは、刹那と悠馬の妹であるヴィオとインハルトだった。

三人称 s i d e e n d

親子対決

三人称 side

刹那と悠馬は、ネオデストロン首領の巧妙な作戦により、刹那と悠馬はなのはと引き離されていた。

「何でヴィヴィオと、アインハルトがどうしてもこの時代にいるんだ？」

刹那と悠馬は、そう言いながら考えていたが、モニターに写るなのはの姿が、二人に冷静な判断をさせないでいた。
刹那にとっては、親友の妹と自分の妹が、互いに相手を殺す勢いでなのはに攻撃を仕掛けていたからだ。

「きゃああああ」

「なのは大丈夫？」

拓真は、なのはを心配して声をかける。いつもなら戦闘中に声をかけることが少ない拓真が、なのはに声をかけるということは、なのはの置かれている状況が、厳しいと言う証拠だった。

「う、うんなんとか耐えれたよ拓真君。でも正直ジュエルシードを封印した後だから強い魔法が使えないけど、私あの子達に勝って見せるね」

なのはは、そう言うとヴィヴィオとアインハルトに向け突撃を仕掛けたのだった。

なのはと、ヴィヴィオがぶつかり合う直前二人の前に現れたのは、あのなのはに恨みを持つ謎の少年だった。

果たして少年はなのはの敵なのか？それとも味方なのか？

三人称 side end

少年の正体

少年 side

俺はこの海鳴市に渦巻く闇の意思を捕獲する為天界から時を越えて、この時代に、やって来た天使なのです。

この時代での情報収集していると、俺は強い力を感じて、その現場に向かうと、なのはと、ヴィヴィオと、アインハルトが、戦っていた。

「何だ模擬戦か驚かせやがって・・・待てよここは過去の世界だな。なのに、何でヴィヴィオとアインハルトがいるんだ？」

「まさか何者かが送り込んだのか？」

俺は、上空で、なのはたちの戦いを観戦していると、なのはたちの側にいるソフィから通信が、入ってきた。

「こらー！あんだ一体何者なの？」

俺はソフィを無視して、なのはの元に行くと、なのはからあなたは一体誰と利かれたので、俺は答えを言う瞬間に、光を放ちなのはを抱え移動を開始したのだ。

少年 side end

なのはと少年

なのはside

私が謎の少女たちと戦ってる時、空から一人の少年が降りてきて、少年が私を抱きかかえて私を助けてくれました。

「ありがとうございます私たちを助けてくれて」

なのはは、少年に感謝の言葉と笑顔で、少年に伝えようとしたのだが少年は無反応だった。

「どうしよう拓真君私こういう人苦手だよー」

なのはside end

なのはが拓真に相談しようとした時、少年が、なのはの手からレイジングハートを奪い逃げ出したのだった。

レイジングハートを奪われたなのはは、魔法が強制解除され、地上へ落ちていくのだった。

「きゃあああ」

その時地上へ落ちているなのはを、助けた二つの人影だった。巢の二つの人影の正体は、神童刹那と風見悠馬の二人だった。

なのはと刹那

三人称 side

「助けてくれありがとうなの」

なのはは自分を助けてくれた少年刹那と悠馬と話していた。

「それにしてもどうしたの？空から落ちてくるなんてさ」

悠馬がなのはに、事情を聞いていた。

「それは・・・」

なのはは、その質問に対しどう答えたらいいのか、悩んでいた。

なのはの様子を見ていた刹那が、悠馬に言ったのだった。

「おい行くぞ」

刹那はなのはを地上に降ろし、ナノハと話している悠馬を、急がせていた。

「あ、名前を教えてくださいあなたたちの」

なのはが二人に言うが、断れてしまったのだった。

「ごめんなのはちゃん僕たちの名前は教えられないんだ」

悠馬はそう言うと、刹那を追いかけて行ったのだった。

そして、二人が飛び去った後なのははある重大なことに気が付いたのだった。

「……！　そういえばどうしてあの子達は、私の名前を知ってたの？　私自己紹介してないのに」

そしてなのはは、家に帰りソフィに拓真が誘拐されたことを伝え、二人で、拓真救出作戦のプランを考えていた。

一方刹那と悠馬はこれからのことを考えていると、自分たちの時代から連絡が入ったのだった。

三人称 side end

未来からの連絡

無事なのはを助けた和え綱と悠馬の元に通信が来たのだった。

三人称 side

「ヤッホー刹那と悠馬君時間移動出来たみたいだね」

「何だアリア？時間通信は、緊急時以外禁止されているはずだろう」

「何よ刹那たらそちらの時間世界に、私たちの敵対組織の一つであるゾーンが、刹那たちのいる時間に移動開始したのよ」

アリアは刹那と悠馬に伝えたのだった。

そして、アリアからの時間通信は切れて悠馬と刹那は、改めて今後の介入のタイミングを相談していた。

「刹那どうする気だネオデストロンの連中だけなら俺たちだけで何とかできるが、ゾーンの連中まで相手をするには、俺たち二人だけではきついぞ」

「大丈夫だ悠馬ゾーンの連中は漁夫の利が常套手段だからたとえこの時代に来てもすぐに動くことはないだろう。もしやつらが動くとすれば闇の書事件解決直後だろう」

「当面は俺たちはまだ動きを見せていないプレシアと、ユーノを改造したネオデストロンの動きを見張ることと、母さんからレイジングハートを奪った少年を探すことだ」

「そうだな刹那」

そのころユーノは一人でなのはの家に向かっていて、レイジングハートを持っている少年を見つけたのだった。

「あれはなのはのレイジングハートだどうしてこの子が持っているんだ」

ユーノは何故少年が持っているのかを調べる為少年の後を追いかけて行ったのだった。

三人称 side end

ユーノの新たな力

ユーノside

僕はネオデストロンに拉致されてしまい、なのはとジュエルシードを探ることが出来なくなってしまった。そして僕の体はネオデストロンによって僕は、改造魔道師になってしまったが、脳改造される前に謎の少年が助けてくれました。

「一体あの子達は何者なんだろう」

僕は、少年たちの無事を祈りつつネオデストロンの追っ手をかわしながらなのはたちと合流する為移動をしていました。

ユーノside end

一方ユーノを逃がしてしまったネオデストロンの首領は、部下のエピ男爵にユーノ追撃命令を出したのだった。

首領の指令を受けたエピ男爵は、自分の部下から一人を呼び出しこう言った。

「よく来たなスライム怪人のスラベームお前に指令を与えるこの少年を捕獲あるいは殺せ」

「了解であります」

スラベールは部屋を出て作戦を開始し現在へ時は進む

「ク、このままじゃ拉致があかない仕方がない戦うしかない」

ユーノは移動をやめ怪人スラベールと戦う為臨戦態勢に入って行つた。だが

この時ユーノは知らなかった自分の中にジュエルシードが埋め込まれていることに。

ユーノの新たな力後編

三人称 side

「げへへ見つけたぞユーノ・スクライア」

「貴様たちは何者なんだ」

「げへへ俺様は、スライム怪人のスラベーム様だ」

「うわあまた変なのが出てて来たぞこっちは急いでるのに」

ユーノは、ネオデストロンの基地から逃げる途中謎の少年がなのはのデバイスレイジングハートを持っていたので、ユーノは、謎の少年の後を、追いかけているとユーノはネオデストロンの追撃部隊と遭遇したのだった。

「げへへユーノ・スクライア俺様と戦え」

スラベームはユーノに襲い掛かると体を分裂させ分身は地面に姿をしみこませユーノの背後に移動を返していた。

「クツセイツヤー」

ユーノは、ネオデストロンの戦闘員とバトルをしていると、背後からスラベームの分身が現れユーノの動きを封じ込めたのだった。

「……しまった！」

ユーノを動きを封じたのを見たスラベーム本体は、ユーノに近づき自分自身の体液をユーノに飲ませたのだった。

「お前僕に何をもませた？」

ユーノはスラベームに聞いた瞬間ユーノの体が空気の入れられた風船のように膨らんでいくのだった。

「まずいぞこのままじゃあ僕の体破裂してしまうその前にスラベームを倒さなきゃでも、僕にはなのはみtainな魔法が苦手だしなあ」

（少年よ力が欲しいのか？ならば我の力を使うがよいさすればお主はメインキャラ扱いされ続けるぞ）

その時ユーノに謎の声が、語りかけて来たのだった

その名は

三人称 side

謎の声に、導かれユーノの体が黄金色の光に包まれたのだった。

「うわあああ」

ユーノの叫びが木霊した。

「ゲヘヘ一体奴の体に一体何が起きているのか？」

その時なのはからレイジングハートを奪った少年もこの異常な力に気づき、侵攻を変更していた。

「！！！」

「何この力は誰なの誰がジュエルシードの力を発現させたの？私も行かなきゃ拓真君がいてもそう思うから」

なのはも現場に向かって走り出したのだった。

そして黄金色の光が収まりスラベームの前に、一人の戦士が現れたのだった。

「げへお前は何者だ？」

「・・・」

スラベーム質問に戦士は答えずただその場に立っていたのだった

三人称 side end

その名は2

ユ一ノside

「僕の名前は、仮面魔道師J3だ・覚えておけ」

「何だと仮面魔道師J3だとーええいかかれー」

スラベームが命令すると大量の戦闘員が僕に襲い掛かってきたのだ
った。

ユ一ノside end

一方未来からの連絡を受け、今後の行動のためにネオデストロンを追う事にした刹那名と悠馬は、ネオデストロンが追っているユ一ノと合流する為移動をしていた。

「刹那これから僕たちの行動次第では僕たちの知っている未来とは違う時間を辿りだすぞこの世界は」

「悠馬少し落ち着けよ確かにこの世界は、僕たちとゾーンの連中の干渉で多少の俺たちの知っている歴史とは異なる事になるかもしれないがそれでも歴史を大きく歪めることにはならないぞまあ天使とか悪魔が出てくれただけだな」

刹那が笑いながら言っていると、悠馬の動きが止まり震えながら指を

指した先には、なんと巨大化した怪人スラベームがいた。

「ええーーーーー嘘ーーーー」

二人は予想外の展開に驚き少し動揺していた。

その時なのはからレイジングハートを奪った自称天使もスラベームのところへ向かっていた。

「あいつは、ちょうどいいやあいつからお父さんを助けてやる」

そう言って、刹那も自称天使を追いかけて行った。

「刹那待つてよ」

悠馬も刹那の後を追いかけて行ったのだった。

金色の魔法少女

なのはside

私は、刹那君に助けられてから家に帰る途中巨大なスライムの化物が現れて、私は避難するため移動していると、私の前に金色の髪の毛と同じ歳くらいの女の子が、現れました。

そしてその女の子が私に言いました。

「あなたはそこで、何もしないの？あなたには戦える力があるのに」

そう言っただけの少女は、私の前から飛び去って行きました。

そして私は少女の言葉で気づかされました。

（私は今までずっと拓真君が私の側にいてくれたおかげであの時お父さんが事故に遭い、家でずっと一人だった私を解放してくれたのは、拓真君だった。だから今度は私が拓真君を助ける番なんだ。待っててね拓真君）

そう言っただけのはは、戦場に向かって走って言ったのだった。

なのはside end

一方なのはが拓真を助けると決意した時拓真と謎の少年の前に現れたのは、なのはの前にも、現れたあの金色の髪の毛の少女だった。

金色の少女と謎の少年

三人称 side

「誰だ貴様は？」

少年が問いかけるが、金髪の少女は黙ったままだった。

少女は、少年に攻撃してきた。

「うわ危ないな」

少年はぎりぎりで、何とか攻撃をかわす。

少女は少年に、再び攻撃を仕掛けるが、少年はまたかわす。だがその時、少年が持っていた、なのはのデバイスレイジングハート（拓真が）こぼれ落ちてしまった。

「！！」

少女は急いでレイジングハートを拾うため移動したが、少年が先にレイジングハートを回収してしまったのだった。

「なるほど君の目的もこれだったんだね」

そう言つて少年は、少女にレイジングハートを見せたのだった。

その直後刹那と悠馬が少年に、追いついたのだった。

三人称 side end

デバイス争奪と巨大怪人退治

刹那 side

俺たちが、母さんからレイジングハート（父さん）を奪った犯人に追いつくとそこには何故かフェイトさんがいた。

「おい悠馬何で今ここにフェイトさんが、いるんだ。確かフェイトさんの登場でもう少し後じゃなかったか？」

「うーんそのはずなんだけど、もしかしたら僕たちやゾーンの連中のせいで、歴史が少しずつ変化してるのかも知れない。刹那これ以上今のなのはさんやフェイトさんに関わらないほうがいいよ」

悠馬は俺にそう言って、この場から離れようとしたが時はすでに遅かった。」

「そこの二人何者なの？」

俺たちに声をかけて来たフェイトさん。

「あなた達も私の敵ですか？」

「え、わちよつとまってください」

俺はフェイトさんに事情を話そうとしたら犯人の少年がその場から逃げ出していた。

俺たち三人は、追いかけながら少年に攻撃を仕掛けながら追いかけ

るが少年は余裕でかわしていた。

そして、俺はその時まで気づかなかった俺が放った攻撃の先に母さんがいることに。

デバイス争奪と巨大怪人退治2

なのはside

私はソフィと一緒にユーノ君や拓真君のことが心配で、家に帰るのをやめて街のほうに行くと、巨大なスライムがユーノ君と戦っているのを見つけた。

「へえーユーノ君で変身できたんだね。フレーフレーユーノ君」

「て、なのはいつの間に、チアガールの格好になってるの？」

ソフィがなのはに聞くと、なのはが答えたのだった。

「そこは突っ込んだめだよソフィちゃん」

そして二人が漫才していると、上空から大量の魔力弾が降ってきたのだった。

「きゃああソフィちゃん大丈夫？」

「ええ、なのはのおかげでねありがとう」

私たちはお互いの無事を確認した時、さっきより大きな魔力弾が私たちのところへ、落ちてきていたのです。

ソフィちゃんは、私を避難させようとしていたが、私は落ちてくる魔力弾の大きさを見て足が震えてしまい動けないのでした。

「きゃああああ」

（私拓真君にもう会えないのかな？）

その時私の耳に、拓真君のの声が聞こえた。

「なのは今行くよ」

そして、空からレイジングハートがなのはの元に落ちてきたのだった。

なのは side end

二人の力

三人称 side

「レイジングハートセットアップ」

そしてなのは体が光に包まれるとなのはの体にはBJとレイジングハートが握られてイタ。

「拓真君無事でよかったよ」

「ごめんなのは心配かけてあ、なのはそこはだめだよー」

なのは嬉しさのあまり拓真を強く抱きしめて拓真の理性に大ダメージを与えていた。

二人のスキンシップが終わり拓真がなのはに聞いたのだった。

「なのは先にどちらを片付ける？僕を誘拐したやつか？スライムの化け物と」

「そうだねユーノ君を助けようか」

「わかった」

そしてなのはたちはユーノと合流する為移動を開始していた。

そのころユーノは、巨大化したスライム怪人スラベームに押されて

いた。

「おらおらさっきまでの異性はどうしたよ正義の味方さんよ」

スラベームは優位に立ちユーノに、問いかけた。

「ク、くそやはり僕は所詮僕のカじゃ奴を倒せないのか？くそー
ー」

ユーノが己の未熟さを知り嘆いていたその時、スラベームは桃色の光に包まれ蒸発したのだった。

三人称 s i d e e n d

謎の少年と刹那と悠馬の関係 1

なのはが拓真と共にユーノの救援に向かったころもう一つの戦いの火蓋が切られようとしていた。

「おいお前そろそろ正体を明かしたらどうなんだ。と言っても俺たちはお前たちの正体は薄々気づいているがな」

「・・・」

少年はただ黙って刹那の言葉を聞いていた。

「刹那どうやらなのはさんたちのほうは無事終わったみたいだよ」

「そうか」

刹那は悠馬の話を聞いて自分たちの周りにある魔法を展開させていた。

「さてこれでよしとさあどうする？僕たちと戦うか？それとも・・・ここで魔人を呼んで逃げるかさあどうするアクセル」

刹那にアクセルと呼ばれた少年が刹那に向け不敵な笑みを浮かべ刹那にこう言ってアクセルが喋りだしたのだった。

「ふふ甘いぞ神童刹那こんな事で俺様を捕まえられると思うなよ」

とアクセルが指をパチンと鳴らすと巨大な魔力反応が複数現れたのだった。

謎の少年と刹那と悠馬の関係2

三人称 side

「刹那と悠馬お前たちの相手は呼んでいる。俺を追いかけたいならこいつらを倒す事だな」

アクセルがそう言うと言分の指を鳴らすと刹那と悠馬ののいる周辺に突如魔力反応に似た力が検出されたのを悠馬が感知したのだった。

「刹那気をつけて何かがこの世界に出てくるよ」

「アクセルお前何をこの時代に呼び込んだ？」

「フ、刹那俺が今呼び込んだ物は、この時代の時間で一年後に姿現わすそれまでお前たちはジュエルシード図研や闇の書とネオデストロンと戦って力を付けておけよ刹那俺と戦う前にな」

アクセルは刹那に言い放つとアクセルはどこかへ転移をしていたのだった。

それを見ていた刹那は心中で誓いを立てていた。（アクセル俺が必ず元に戻してやるからな）

再会と温泉旅行

なのはたちがスラベームを倒した数日後なのはの父親の土郎の提案でしばらく高町家と友人たちは温泉旅行に来ていた。

「さあ着いたぞみんな」

そう言つて土郎が指を指す方向を見るとそこには大きな日本旅館が建っていた。

「うわあ大きいなあーねえアリサちゃんすずかちゃん？」

「家の別荘の方が大きいわよ」

アリサはそう言いながら旅館の中へと入って行つたのだった。

なのはは、アリサたちと旅館を散策していると、刹那と悠馬の姿を見つけたのだが、刹那たちはなのはの姿を見つけ急いで自分もシイの姿を見えなくする魔法を発動させたのだった。

「おいおいどうして母さんたちがここに来てるんだよ」

刹那と悠馬は少し焦っていた。

旅館とジュエルシードと使い間

なのはは、旅館を散策していると刹那と悠馬の姿を見かけたのだった。

三人称 s i d e

「何でここに母さん達が着てるんだ？」

刹那は悠馬に事情を聞いたのだった。

「刹那落ち着いてよここは旅館だよそれに刹那僕たちの名前はばれてないから大丈夫だよ。それにほらもう遅いよ刹那」

悠馬はそう言いながら指を指す方向からなのはが迫っていた。

「ハア、ハア、やっと追いついたなの」

「私ねあなた達にお礼が言いたかったの」

「お礼？」

刹那がなのはに聞くとなのはが答えた。

「ほらこれだよ」

そう言ってなのははレイジングハートを出した。

その時刹那と悠馬に念話が聞こえて来た。

（おーいお前たちお前たちは未来から来たって本当？）

刹那と悠馬は不意にかけられたこえを探して辺りを見回すが、辺りには自分たちとなのはしきないのだった。

二人の行動を不思議がっていたなのはが気づいた。

「拓真君駄目じゃない私以外と念話しちゃあ」

「えええー」

なのはの言葉を聞いた刹那と悠馬が驚いていた。

「ねえ刹那君刹那君のお父さんの名前って、拓真さんだよな」

「ああ、そうだ悠馬やはり直接見たら驚くな」

「そうだね」

「見つけた」

そして三人を少し離れた場所から見張るオレンジ色の髪の女性の正体は？

三人称 s i d e e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1683v/>

デバイスになった少年

2012年1月9日02時49分発行